
HUNTER × HUNTER ~漆黒の転生者転生~

神威

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HUNTER×HUNTER～漆黒の転生者転生～

【ZPDF】

N80720

【作者名】

神威

【あらすじ】

オリジナルキャラの転生者がHUNTER×HUNTERの世界で原作ブレイクしていきます。オリジナル要素満載です。

第一話（前書き）

初めてですががんばっていりうと思こます。

第一話

? ? ? (いじじじ何だ?)

少年が目を醒ますと見たことない真っ白な空間にいた。

少年は立ち上がり周りを散策していると、どこからか声が聞こえてきた。

? ? ? 「 田を醒ましたか」

少年 (ビクッ !)

少年は真後ろからの声に驚き素早く振り返った。

そこには長く白い髪をはやした仙人みたいな老人が立っていた。

少年「 (こいつの間に…) あんた誰だ……そしてここはどこだ」

? ? ? 「 ワシか? ワシはそつちの世界でいうと【神】みたいな存在
じゃ … そしてここがワシが神の力で創った空間じゃ 」

神と名乗る老人が楽しそうに説明した。

少年「じゃなんで俺は」など」「死んで

神「死んだからじゃ……」

……

……

……

……

……

少年「ハア？…（なに黙つてんだ）のジジイ」

神「正確にいえば死んで死んでしまったかの～

少年は顔を真っ赤にしてキレた…

少年「なんで死ななきゃいけないんだよー……まだ色々やつたいこととかあつたのに……

神「まあ一落ち着け」

少年「これが落ち着いてられるかよー」

神「勝手に殺したのは謝るがこいつにも事情があるんじゃ

少年「じゃどんな理由だよ…つまらない理由だと殴り飛ばすからな…

神は少年の発している殺氣と言葉に冷汗をかきながら理由を説明しようとしたかった。

神「実はのワシの孫がお前に助けられたことがあっての、それで御礼をしようとしたら間違つて殺してしまったのじゃ……テヘ」

少年「……り、理不思だ……てか、神なんだつたら生き返れるんじやないのか！」

神「それがの～規則で出来んのじゃよ」

少年は神の言葉に絶望していくと、神がしゃべりはじめた。

神「転生といつ形でなら出来ない」ともないんじやが……びりあるへ。」

少年「あるんなら早く言えよ」

少年に元気がかえってきた。神はその様子を「やれやれ」とこいつた感じで見ていた。

神「特別にお前だけの世界を創つてやる感謝しどよ……じてどんなせかいがよ～？なんでもよ～ぞ」

少年「アニメとかでもいいのか？」

神「ああよ～ぞ」

少年「じゃ……エリザベス×ヒューリーの世界にしてくれ」

神「あんな命の危険のあるのでいいのか?」

少年「ああ かまわない」

神「簡単に死んでもうつたりいやなのでな……三つ願いを叶えてやる」

少年「うつやマジドーじゃ~じゃ~
…よし~」

神「決まったようじやの~」

少年「えっと……一つは身体能力を最強に……二つは念能力を三歳くらいから使えはじめられるように……三つは大業物の刀をくれ……」
「こんなもんか」

神「そんなんでいいのか? もうとチートっぽくしないのかの~?」

少年「いいのいいのチートにしたら楽しくならないからでも最強にはなるつもりだけじね」

神「まあ一おぬしがよいのじゃつたら……どうこう形で転生する~」

少年「うへん……転生する人はだれでもいいけど(原作キャラ以外)
原作のはじまるとしが18歳がいい」

神「わかった……もう転生してもよいかな? 刀は頃合いでみて贈る
からの」

少年「どーも」

神「ではいくぞ！」

少年はだんだん光りに包まれていった。

少年「あつ忘れてた…ジジイ俺の名前は【レン・アブソリュート】
だ」

レンが言い終えると全身が光りに包まれて消えた

神「がんばれよ」

第一話（後書き）

次回も楽しみに。

主人公紹介（前書き）

次は主人公紹介でーす。

主人公紹介

【レン・アブソリュート】

幼いときから武術、剣術を学んでおり、大会などで連続優勝記録を更新している。頭脳も良く、軍から依頼や勧誘が絶えず来る。そのため暗殺や誘拐など、されるが、自らの力で撃退している。家族は幼いとき、交通事故でなくなっているため一人暮らし。親戚が引き取ると言つていただが金とレンの頭脳が目的なので断つている。

ある日道を歩いていると子供がトラックに引かれそうになると助けた。この出来事がきっかけで神と名乗る老人と出会い。

主人公紹介（後書き）

引き続きがんばっていきます。

第一話（前書き）

引き続がんばつてこれもす。

第一話

レン（しらない天井だ）

？？？「あつ田覚ましたのね」

しらない女性が俺の顔を覗き込んでいる。

女性「うーん……以前どひょひつかな……決めた【レン】ね」

女性は笑顔でしゃべりかけて来る。そしていつのまにか眠ってしまった。

~~~~~三年後~~~~~

レン「お母さん森に遊びに行って来るね

母親「あぶないことしたらダメよ」

レン「わかってるよ」

レンせわうこうと家を飛び出し森に向かつた。

レン「今日は何じょうかな……念でもするか」

そういうと大きな石の上に座禅を組んで集中したした。……する  
と湯気みたいなのが体が覆つた。

レン「よし」

そういうと立ち上がり【虎徹】を出し素振りをした。それから3  
時間ぐらいたつた

レン「（こんなもんでもいいだろ）ふう……帰るか」

そういうと村に向かつて歩き出した。

レン（そういうえば俺クルタ族だったつけ……ジジイの野郎いきなり死  
亡フラグじゃねーか……）

そんなことを考えていると向こうから男の子が「おーい」とい  
つて駆け寄ってきた。

男の子「どう行つてたの？」

レン「森に行つてた……そういうルカはどうしたんだ？」

男の子はルカといひじい

ルカ「帰りが遅いかからレンのお母さん見てきてって言われたから」

レン「なるほど……じゃいそいでかかるか」

レンはルカと一緒に村に向かつて歩きはじめた。

ルカ「いつも森に行ってるけどなにしてんの？」

レン「教えない（修行してるなんていえないよな）」

ルカ「ケチだね」

そんなことを言いかつてると村に着いた。

ルカ「じゃまた、バイバイ」

「おひさ」と返すと家にかえつていった。

レン「ただいま」

母親「お帰りなさい…」飯出来てるから手洗つてきなさい」

レン「ほーい」

やうこいつとササッと手を洗ってリビングに行き、「飯を食べた。そのあと風呂に入つて部屋にいった。

レン（あしたなにしようかな？…………あつそーだ何系か調べてないやあしたしらべよーとおやすみ）

次の日

レン（よし、系統しらべるか……なんだつたつけ水見式オーラ選別方だつたような気がする……グラスにたつぶりと水を入れてその上に葉っぱを浮かべて練をする）

レンが練を発動すると水の色が変わつていった

レン「放出系だつたか……これから特訓だな」

## 第一話（後書き）

引き続きがんばってこわます。

## 第三話（前書き）

とても短いです。

## 第三話

～～～五年後～～～

レン「だいぶたまになつてきたな」

あたり一面木が難<sup>ハラ</sup>き倒されたりして<sup>ハタハタ</sup>いた。

レン「そろそろ旅に出るかな…蜘蛛くるかもしんねーし」

そういうレンはその場からたたけつていつた

レン（これからビーストかなジン・フリークス探しにいくとか…いやまでよ殺し屋するのもありだな……よし殺し屋にしてよう全<sup>ハナシ</sup>は急げ  
だ）

男「うああああ」

街に悲鳴が響いた。漆黒のロングコートを着てフードを深くかぶつている少年<sup>レン</sup>が追い詰めた男に向かつて喋りはじめた。

レン「お前がマフィアのボスか?...」

ボス?「お、お前は誰なんだ!」

マフィアのボスは震えながら叫んだ

レン「俺か?... そうだな【漆黒の転生者】といえばわかるかな」

ボス「お、お前が最近噂になっている殺し屋か!.....た、頼む助けてくれ!金ならいくらでもやる!女もやるから見逃してくれ!」

レン「ムリ」

レンは簡単に返すと刀【虎徹】を振りかぶつてそのまま振り下ろした。

レン「任務完了」と.....そろそろ出て来たらどうだ?「..」

?/?「ばれてたか」

すると屋根の上から老人が降りてきた。降りてきて向き直るとレンがしゃべりだした。

レン「あなたは.....ゾルティック家か?」

ゾ家「つー…なぜ知つている」

レン「前に一回調べたことがあつてな（殺氣バンバン出したるよ…  
これぐらいだまつたら大丈夫だけど）」

ゾ家「そーかまあ良いわ…お前が【漆黒の転生者】かの」

レン「ああ」

ゾ家「こんな子供じやつたとわの……本題に入るがおぬしのせいで  
仕事が減つておるんじやよ」

レン「大丈夫…もう辞めるから金貯まつたし」

ゾ家「そーかそーかそれはよかつた。わしの名はゼノじや。そして  
これが電話番号じや殺してほしい奴がいれば電話してくれ」

レン「どーも。俺の名前はレンだよろしく…で、手合わせしてみな  
い」

レンはやうこひと殺氣をだしてするどに目つきで睨んだ

ゼノ「やめとくわ」

レン「なーんだつまんねいつかはしてもりうからな  
そういうとレンは闇に消えていった

ゼノ「いつか…か……勝てつかの？」

ゼノが発した言葉は誰の耳にも届くことがなかつた。

## 第三話（後書き）

引き続きがんばってこなめます。

## 第四話（前書き）

ハンター試験始まります

レン「996…997…998…999…1000ふう～疲れた」

もうこうと仰向けに寝転がった

レン「あれから十年か…ハンター試験受けに行かなきゃなたしかゴンたちもこの試験受けるはずだな楽しみだ。…そうと決まればさつさといくか」

レン「ナビゲーターはこいつがゴンたちは凶獣<sup>キジヤク</sup>狐つていう魔獸だった  
つけ」

ナビゲーターはハンター資格試験会場の場所に案内をしてくれる  
のが役目（毎年試験会場が変わる）ちなみに、受験者の数を減らす  
ためもある。

レン「失礼しまーす」

????「よーくきたなハンター試験希望者だろ?俺の名前はクルル  
つてんだようしづくな」

レン「おつ俺はレンだようしづくな(あんがい普通だった)」

お互いに握手をしてしばらべの間談笑していた

クルル「やあそろこくか今行つたり一一番乗りだぜ」

レン「ビーでもいこけどこいひぜ」

せうこうとクルルの背中から翼が生えた。レンは「うわ」と驚いた。

レン「いいなこれ」

クルル「我々一族だけだからな…… あ行こつ手を握んでおくれ

レン「レッツゴー」

⋮

クルル「ザバン市・ツバシ町の2・5・10は…つと…！」だ

レン「定食屋かよ……まあいいや入ろ」ガラガラ

店員1「いらっしゃーい…御注文は…？」

クルル「ステーキ定食」

店員1「（ピク）焼き方は？」

クルル「弱火でじっくりと」

店員1「あいよ……」

店員2「お客様奥の部屋にどうぞ」ガチャ

ジュー・ジュー

レン「あの店員2可愛かったな」

クルル「た、たしかに…つてちがう…まあがんばれよ大丈夫だと  
思うけど…」

レン「まあがんばるわ…！」までありがとな」

クルル「お安い用だ…じゃーな」

レン「定員2にもよろしく」

クルル「あほ」カチ

ウイーン

レン「ステーキ定食つまつ！」

チン！

レン「B100階か…誰かいるかな」

しーーん

レン「だ、だれもいねえー……ハア……寝よ」

ガヤガヤ ワイワイ

レン「うつせぇーーー！」

しーーん

レン「全く静かに出来ねーのかよ(はやくはじまんねえーかな)」

？？？「ちよつと瓶」

レン「なにってか誰？（機嫌わりーのにはなしかけんなよ）」

？？？「オレはトンパよろしく……といひで新人なのに一番んだつたんだね」

レン「ああ…それで？」

トンパ「すいこよーおうとそりだ…お近づきの呑じて飲みなよ」

「とにかく一ヒャードを差し出してくる

レン「いらね（たしか新人漬しのトンパだつたような）」

トンパ「そーいわざに（早く飲みやがれ）」

レンはちよつと殺氣をだして「いらね」といった

トンパ「（ヒヤー）わ、悪かつたなじやました」  
「とにかく残しがつていった

ジリリリリリリリリ

？？？「ただ今もつて受け時間を終了いたします……では、こ  
れよりハンター試験を開始いたします」  
レン（やつとか待ちくたびれたぜ）

試験官？「さて、一応確認いたしましたが、ハンター試験は大変厳しいものもあり運が悪かつたり、実力が乏しかつたりすると、ケガしたり、死んだりします。」

試験官？「先程のように受験生同士の争いで再起不能になる場合もございます……それでも構わない……という方のみ、ついて来てください。」ザツザツぞろぞろ

試験官？「承知しました……第一次試験405名、全員参加ですね」

レン（当たり前だろ）こまで着た時点で決まってるにだろうに第一次試験はどんななんだるうな…………んなんか進むペース早くなつてきでんな……マラソンってとこかな）

試験官？「申し遅れましたが、私、一次試験官担当官のサトツと申すものです。これより、皆様を一次試験会場へ案内いたします」

ボウズ頭「一次……？つてことは一次は？」

サトツ「もー、はじまっているので」「やります。一次会場まで、私について来る」と、これが一次試験で」「やります」

サトツ「場所や到着時刻はお答えできません。ただ私について来ていただきます」

レン（やつぱりな……変態が近づいてくる…）

変態「ねえきみどのくらい強いんだい」

レン「お前より強いよ……で名前は？」

変態「クックククぼくの名前はヒソカだよ」

レン「俺の名前レンだよろしく」

ヒソカ「よろしく」

レン「なんやかんやで出口だな」

レンたちは湿原に出た。そして出口のシャッターがおつる。ガ  
チャン

サトツ「この湿原の生き物はありとあらゆる方法で獲物をあざむき、  
捕食しようとします」

サトツ「標的をだまして食い物にする生物達の生態系……詐欺師の  
壇とよばれるやえんです」

サトツ「だまされる」とのないよう注意深く、しっかりと私のあと  
をついて来て下さい」

オッサン「おかしな」と言ひながら、だまされるのがわかつてだまさ  
れるわけねーだろ」

???「ウソだ! そいつはウソをつこつこるー」

一人の傷だらけ男が出て来た

???「やつは二セ者だ! 試験官じゃないオレが本当の試験官だ  
!」

そういうと男はサトツを指差した

オッサン「ニセ者? どうこういとだ!」

ボウズ頭「じゃこいつは一体…?」

レン（馬鹿だねーハンターがこんなやつらに負けるわけないのに）

試験官? 「これ見る!」

やつじと試験官? は猿みたいなのを出した

試験官? 「ヌメーレ湿原に生息する人面猿!」

試験官? は続ける

試験官? 「人面猿は、新鮮な人肉を好む、しかし、手足が細長く非常に力が弱い…そこで自ら、人に扮し、言葉巧に人間を湿原に連れ込み他の生き物と連携して獲物を生け捕りにするんだ!」

また、サトツに指差した

試験官? 「そいつはハンター試験に集まつた受験生を一網打尽にする氣だぞ!」

その瞬間試験官? はバラバラになり肉変とかした。そしてヒソカとサトツと針がいっぱい刺さっている奴がレンの方をみたほかの受験生たち唖然としていた。

ヒソカ「あれ…君がやつたのかい」

レン「さあー（見えたのは三人だけか）」

やうじうとヒソカが笑い出した

ヒソカ「君と手合させ願いたいね」

レン「いつかな」

またヒソカが笑い出し「楽しみにしてるよ」といった。すると今度はサトツがしゃべりだした

サトツ「少々トラブルがありましたが私を信じる者だけついて来てください」つと黙つて走りだした。

オッサン「もうどうなつてんだ」

金髪「ついでいくしかあるまい」

レン（あの金髪たしかクルタ族だつたよつの名前は……忘れたあとで聞こ……といひでヒソカ殺しそうだな霧も出て來たしまあーいいか）

すると銀髪の少年が話しかけてきた

銀髪「ねえねえ歳いくつ？あつ俺キルアね」

レン「俺かー8だちなみに名前はレンだ」

キルア「レンつてもつちや強いでしょ空きがないし脚のはじび方とか全然違つもん」

レン「ああーどうだい」

キルア「ヒソカとどつちが強い？」

レン「俺かな？」

キルア「うげつ…マジで！」

レン「アハハ、もうついたみたいだぞ」

キルア「次どんなのだろ退屈しないのがいいなあ」

レン「どーだろ……ん

遅れてきたヒソカの肩にオッサンが担がれていた、レンはヒソカに近づいてなにがあったか聞いた…………話しが終わりと同時にドアが開いた……そこには大男と女性がいた。大男からぐるぐるなるなどの腹の音が聴こえてきた。

女性「どお？おなか大分すいてきた？」

大男「聞いてのとおり、もーペコペコだよ」

女性「そんなわけで一次試験は……料理よ…」

## 第四話（後書き）

引き続きがんばってこなめます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8072o/>

HUNTER×HUNTER～漆黒の転生者転生～

2010年11月12日18時03分発行